

書 評

岡本正明.『暴力と適応の政治学—インドネシア民主化と地方政治の安定』京都大学学術出版会, 2015 年, 304 p.

森下明子 *

本書は、多民族国家インドネシアにおいてなぜ 1998 年に始まる民主化がうまく定着し、政治的安定が実現したのかを、政治学および地域研究的視点から探るものである。本書の定義によると、政治的安定とは「イデオロギー・宗教・エスニシティ・階級・地域間格差など社会的亀裂に基づく対立が物理的暴力の行使に発展せず、政治体制が安定していること」(p. 6) を指す。本書はこの政治的安定のメカニズムを西ジャワのバンテン地方の事例から分析し、インドネシア全体にも一般化しうる政治学的知見を提供している。また本書は地域研究としても魅力に溢れる内容であるが、その分析枠組が十分に明示されていない点が惜しまれる。

一般に、多民族国家における民主化は社会的亀裂をさらに深め、暴力を伴う紛争を引き起こす可能性を高めるという議論がある [Snyder 2000; Collier 2010]。インドネシアでも民主化前後の 1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて、都市部では反華人暴動、マルク、カリマンタン、スラウェシのボソでは住民間の暴力的な紛争が生じた。しかし 2000 年代後半以降は、そうした暴力的な社

会混乱や紛争が起きなくなり、今日では政治的安定が実現している。

このインドネシアの政治的安定のメカニズムを探るために、これまでのインドネシア政治研究では、主に国政や国軍に焦点を当てた分析が行われてきた。たとえば、著者によると、国政の分析からは中央政界の政治エリート間の合意形成や政党の中道化が指摘され、国軍の分析からは国軍改革による国軍の脱政治化とその結果として国軍による紛争への党派的介入の解消が指摘されている (p. 8)。しかし、地方レベルでは社会的亀裂などの紛争を引き起こしうる要因がいまもある。そこで本書が注目するのが、地方政治の分析である。

本書の具体的な問いは以下である。インドネシアでは民主化と地方分権化によって地方の政治経済的資源が拡大し、それにより、「どの地域でも地方エリート間で資源争奪戦が起きた。そのエリート間の対立が社会的亀裂に沿った動員を伴えば、対立は深刻化、暴力化する可能性が高まったが、実際にはそうはならなかった。なぜであろうか」(p. 9)。

本書はこの問いに対して、政治学的視点から以下の 2 つの説明を行なう。ひとつは、自治体の細分化である。地方分権化後のインドネシアでは自治体内の少数派グループなどが自治体新設運動を展開し、自治体数が急増した。その結果、「社会的亀裂に沿った政治的対立軸が減少して自治体内の同質性が高まり、その結果として地方政治の安定につながった」(p. 9)。

もうひとつは、総選挙と地方首長選挙にお

* 京都大学学術研究支援室

ける社会的亀裂の非政治化である。インドネシアの総選挙は5年に一度、国会議員選挙と地方議会議員選挙が同日開催で行なわれる。民主化後の総選挙では20以上の政党が参加し、また、1999年と2004年の総選挙では比例代表制が採用されたことから、主な争点は国政レベルの課題となった。他方、公選制で行なわれる地方首長選挙では、ペアで出馬する正副首長候補が異なる社会的亀裂の代表者の組み合わせであったり、同じ社会的亀裂の代表者の組み合わせが複数乱立したりする状況がみられた。そのため、宗教やエスニシティなどの社会的亀裂が争点化することはほとんどなかった (pp. 9-10)。

本書はこの2つの説明を実証するために、西ジャワのバンテン地方の事例を取り上げる。バンテンに注目する理由は6つ挙げられているが (p. 11)、おそらく最も重要な理由は、バンテンではエスニック・アイデンティティに依拠した暴力集団が政治的影響力をもっている、という点であろう。著者はバンテンでの長期にわたるフィールド調査を通して、暴力を政治的資源とする集団が紛争という手段を使用することなく政治的権力を獲得・維持・拡大する過程を、果敢にもごく間近からつぶさに観察し、その様子を彼らの人となりや政治的生き様も含めて丹念に鋭く描く。ここに地域研究としての本書の魅力がある。

本書は、こうした政治学的かつ地域研究的なアプローチに基づき、以下の構成にみるように、バンテンの政治分析に主眼をおいている。

序 章 暴力集団の台頭と「地方政治の安

定」—社会的亀裂はなぜ政治化しなくなったのか

第1章 権威主義体制の崩壊から民主化・分権化へ

第2章 暴力集団（ジャワラ）とイスラーム—バンテン地方の政治構造の歴史的展開

第3章 独立宣言，社会革命，そしてアイデンティティの政治—1945-1971年

第4章 ウラマーとジャワラを通じたスハルト体制の浸透—1971-1998年

第5章 細分化の地域主義—バンテン州設立運動

第6章 州「総督」と呼ばれる男—権力闘争とジャワラによる地方支配—2000-2006年

第7章 新勢力との闘争—バンテン州知事選，2006年

第8章 福祉正義党—イスラーム的正義の台頭と皮肉なアクロバット

第9章 安定化のポリティクスの多様性—インドネシア地方政治の全体像

第10章 暴力と適応の政治を超えて

第1章ではインドネシアの民主化改革の概要が示され、地方分権化政策の詳細とその後の自治体新設運動の全国的展開が精密かつ簡潔に述べられている。第2章から第8章まではバンテン地方の政治の実態が時系列で描かれ、特にジャワラ (jawara) と呼ばれるバンテンの剣術・呪術に長けた男たちの集団とそのリーダーであるハサン・ソヒブに焦点

が当てられている。そして第9章では、バンテン以外の地方の事例が取り上げられ、本書が提示する政治的安定に関する説明がインドネシア全体に当てはまることが示されている。さいごに第10章ではフィリピンとタイの政治との比較を通して、今後のインドネシア政治の行方が論じられている。

本書がこれまでのインドネシアの政治的安定に関する議論に、自治体の細分化と選挙における社会的亀裂の非争点化という新たな視点を提供した意義は大きい。これらの指摘は国政や国軍の分析からはみえてこなかった点であり、地方レベルの分析によって初めて明らかになったものである。また、これらは第9章で示されるようにバンテンにのみ当てはまる要因ではなく、インドネシア各地の政治的安定を説明する際にも有効である。

しかし、本書の分析がインドネシア全体に有効であるがゆえに、本書の醍醐味ともいえる暴力集団に関する詳細な記述の意義が、以下の2点において不明瞭になっている。ひとつは暴力集団の分析的位置づけである。自治体の細分化と選挙における社会的亀裂の非争点化は、バンテンのように広範囲の社会・経済・政治的影響力をもつ暴力集団が存在しない地方においても当てはまる。それゆえに、本書が暴力集団に注目する必要性がどの程度あったのか、疑問が残る。

また、暴力集団と紛争の関係性についても不明瞭である。バンテンの暴力集団は、そもそも紛争の発生に寄与する大きな要因となりうるアクターだったのだろうか。たとえば2000年代初めに起きた中カリマンタン州の

住民紛争では、ダヤック人のNGOグループがマドゥラ人移民の暴力的排斥を主導したが、このとき地元で社会・経済・政治的影響力をもっていた暴力集団は紛争に直接関与しなかった[森下2015]。この紛争の首謀者たちは、紛争を手段として、これまで手に入らなかった政治的影響力を得ようとした人々であり、バンテンの暴力集団のようにその時々体制にうまく取り入りながら政治経済的成功を手にした人々ではなかった。バンテンの暴力集団のような、いわば地方の「勝ち組」がわざわざ紛争を引き起こす必要はあるのだろうか。

しかし地域研究的な視点からみると、バンテンの暴力集団の実態に迫ることには大きな意義がある。著者はその意義をあとがきのなかで半ば謙遜気味に以下のように述べている。「本書はインドネシア政治を扱う地域研究の書物であり（中略）ある分析枠組みでシャープにインドネシア政治に切り込むというより、民主化・地方分権化時代のインドネシア人たちの人となり、政治的生き様を鮮烈に描くことを重視するものとなっている」（p. 269）。さらに踏み込んでいえば、評者の理解では、本書は地方政治アクターの生き様の描写を通して、インドネシアの政治的安定のメカニズムをバンテン地方の文脈、さらにいえばインドネシアの暴力集団の行動原理からも説明しようとするものである。

しかし、残念ながら本書では政治学的分析による説明が示されている一方で、地域研究的視点に基づいた説明は明示されていない。その代わりに、本書はバンテンの暴力集団に

関する一次資料のような詳細な情報と人物描写を提供している。まるで読者にさまざまな切り口から地域的文脈をみつける楽しみを敢えて委ねているようにもみえる。しかし、もし著者が地域研究的視点からもさらに踏み込んだ分析を示してくれていれば、本書はインドネシアの政治的安定のメカニズムに関する地域的文脈をも明らかにするものとなり、さらには政治学と地域研究の双方のアプローチを接合しうる画期的な分析枠組を提示するものになったであろう。

引用文献

- Collier, P. 2010. *Wars, Guns, and Votes: Democracy in Dangerous Places*. New York: Harper Perennial.
- Snyder, J. 2000. *From Voting to Violence: Democratization and Nationalist Conflict*. New York: W.W. Norton.
- 森下明子. 2015. 『天然資源をめぐる政治と暴力ー現代インドネシアの地方政治』地域研究叢書 29. 京都大学学術出版会.

水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編。
『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015 年、390 p.

谷口謙次*

近年、アジア研究において歴史研究、特に経済史研究への関心は低下している。他方で、地域研究や人類学、あるいは現状分析への関心はますます高まっている。これはここ

30 年余りのアジア諸地域の経済発展、それに伴う政治的・社会的変動が背景にあるのだろう。だが、実際に地域研究や現状分析などの書籍を手にとると、その多くで諸問題への歴史的・経済史的背景に多くの紙面が割かれている。つまり、アジア研究において歴史学や経済史に関する潜在的な需要は決して低下していない。むしろ高まっているのではないかと筆者は感じている。

そうした中、新たに水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編『アジア経済史研究入門』が出版された。これまでアジア史に関する研究入門としては、島田虔次ほか編『アジア歴史研究入門』と桃木至朗編『海域アジア史研究入門』がある。『アジア歴史研究入門』は総索引・総目次を含む全 6 巻と大作であり、現在も有用な情報を数多く含んでいる。しかし、出版からすでに 30 年が経ち、新たな研究や資料が多数出されている。『海域アジア史研究入門』はコンセプトが本書と非常に近いが、時期が 9 世紀から 19 世紀初頭と限定されており、分野も経済史のみならず、文化史、宗教史、外交史と幅広い。対象領域も東アジア・東南アジアが中心で南アジア・西アジアはほとんど触れられていない。アジア全体をカバーし、古代から現代までと幅広い時代について論じられている本書は、アジア経済史を学ぼうと格好の良書である。

まず、本書の構成をみることにしよう。本書は「序章」から始まり、「第Ⅰ部 東アジア」、「第Ⅱ部 南アジア」、「第Ⅲ部 東南アジア」、「第Ⅳ部 西アジア・中央アジア」の 4 部からなる。第Ⅰ部は中国について論じ、

* 大阪市立大学大学院経済学研究科